



キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第1回

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

セラピー的態度を越えて

イラストーおめでとうございます。

編集部からいただいた新連載のタイトルに、はじめ少し怖じ気づいておりました。「現代社会の座標軸」なんて、とてもわたしの語れることではありませんし、日本に住むキリスト者の生き方はさまざまなのに、これが正しい生き方だ、などと勝手に決めつけることもできません。

浮かんでくるイメージはと言えば、テレビのニュースに向かって一人ぶつくさ気を吐い

ているお父さんの姿です。わたしもよく妻や娘たちの冷たい視線を浴びていますが、こちらはだまじめで今日の社会を憂えているつもりなのに、ふだんの暮らしぶりが災いしてか、ちつとも共感してもらえない、ということがよくあります。

学校でも、学生たちは「善悪を論ずる」ということをあまり好みません。ものごとは結局のところ各自がよいと思うかどうかで決まるので、正しいとか間違っているとかを一概に論ずるのは、押しつけがましくてウザイことのようにです。そればかりか、そういう議論はいつも「自分が正しくて相手が間違っている」という前提から出発するから、対立や争いごとを引き起こし、ひいては国や民族の間で戦争が起きる原因にもなってしまう、と言われます。

しかも、こうした善悪や正邪の議論に、宗教が絡むといっそう危険な感じがいたします。

「現代世界を揺るがしている多くの紛争は、宗教の対立が原因である。不毛な教義論争が、どれだけ人々を傷つけ、命を奪ってきたか。人間の歴史は、人を生かすはずの宗教が、神の名のもとにそれと正反対のを行ってきた歴史だ」。そう畳みかけられると、キリスト者として今の世の中をどのように見たり考えたりする「べき」か、などと論ずるのは、やはり無謀で歓迎されざることに違いない、という気がしてきます。

けれども、実はそのように考えることが、まさに今日わたしたちが直面している問題の症状や原因の一部でもある、ということはないでしょうか。道徳的判断を留保するこうした態度は、「セラピー的」と呼ばれます。セラピスト（心理療法者）は、相談に来た人に性急な善悪の判断を下しません。まずは心を開いて、その人の話をゆっくり聞くことが大切だからです。でもそれは、誰もいつまでも

キリスト者として今の世の中をどのよう

見たり考えたりする「べき」か、などと論ずるのは、

無謀で歓迎されざることに違いない、という気がしてきます。

けれども、実はそのように考えることが、

まさに今日わたしたちが直面している問題の

症状や原因の一部でもある、ということはないでしょうか。

何の判断もしなくてよい、ということではありません。相談に来た人がやがて自分自身で判断を下すことができるようになるために、というのが本来の意図なのです。

わたしは、教義や神学の論争を不毛だとは思いません。それが平和を乱す原因だとも思いません。かえって、そういう議論が自由活発に交わされないことこそ、危険な兆候であると思うのです。言葉のやりとりを面倒がる人は、力で応酬するようになります。説得術や妥協の模索は、人間が編み出した共存の努力です。政治が貧しいところでは、軍隊がものを言います。

そして、宗教にかかわることこそ、公の言葉による相互検証が必要なのだろうと思いま

す。たとえば、オウム真理教の事件の時に、

もし「ポア」の教義について、日本の仏教の専門家たちとの間に十分な「教義論争」があったなら、どうでしょうか。あるいは、イスラームの精神的指導者たちの中から、テロを非難しないどころか容認し奨励さえする発言が相次いだ時、もし「ジハード」の意味についてもう少し広範な「神学論争」が起きていたら、どうでしょうか。もしかすると、もう少しバランスのとれた冷静な見方も生まれたのではないか、と思います。

論じ合うのは、唯一の最終解答を出すためではありません。自分たちとは異なる考え方をする人々がいて、その人々の考えにも一応の筋道がある、ということを知るためです。

いやいや、そんなに簡単じゃないよ、と言われるかもしれません。キリスト教の内部で起こっていることを見れば、まったくそのとおりです。アメリカの保守的な土壌で、進化論に反対している人々と「教義論争」をいくらか真剣にしてみたところで、さほど相互理解が前進するようにも思われません。同性愛に関する諸教会の議論も、それぞれの陣営が固定化してしまつて話し合う余地がないように見えます。でも、わたしたちは少なくとも自分の意見がすべての人の意見ではない、という事実を知ることができます。

テレビに向かつて怒っているあなた。ほんとに腹の立つことが多いですね。テレビは言い返してきませんから、こちらの言いたい放題で、実は案外ストレス解消になっているのかもしれない。それを他の人と論ずる段になると、自分のひとりよがりや思い違い、知らぬ間に染みついていく偏見などが露になります。「他の人」といつても、仲間内だけではやっぱり同じことです。居酒屋で盛り上がる上司の悪口は、相槌ばかりの議論です。

この連載でわたしが読者のみなさんと試みたいと思うのは、何とかして一步それらを越え出ようとする努力です。これからどんな展開になるのか、わたしも見当がついているわけではありませんが、一年間よろしくお願ひいたします。